

---

# ゴッドイーターバース

仮面ライダーズラッシュ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゴッドイーターバース

### 【Nコード】

N7920V

### 【作者名】

仮面ライダースラッシュ

### 【あらすじ】

仮面ライダーバースこと伊達明は、異世界に來た。

仮面ライダーバースに変身しながら荒ぶる神に挑む！

狩りは進化した！超連射ハンティングアクション！数々の武器と仲間と共に生き残れ！

「助けて、後藤ちゃん！！」

## ゲームと現実と荒ぶる神（前書き）

思いつきで始めてみた。

## ゲームと現実と荒ぶる神

伊達SIDE

おっす！

俺は伊達明！元患者だ！

俺の頭に有った弾丸を取り除く手術は成功した。

あの医者がめついがなかなかの腕前だったな。まさか、成功したとは…

でも、喜んでばかりいられない。

会長からの話では、火野達がグリード戦い続けてるんだしな。

また、戦線復活しなくちゃな。

でも、焦ったて良い事は無いからな。

ゴッドイーターバーストでもやるか！

何だその目は！？

自分で言うのもあれだけど、俺欲望まみれなのよね！

ゲーム位やったって良いじゃない。

さてと、PSP着けていつちよプレイ！

約3時間後、俺こと伊達明は眠り始めた。

## リンドウSIDE

今回の俺達の目的はオウガテイル3体とヴァジュラ2体の討伐。

ヴァジュラ1体はいいところで倒せた俺達は近くの壊れた教会で次の獲物を待つことにした。

その後、匂い？か。何かに釣られたオウガテイル3体が来た。

しかし、ゴッドイーターの優れた耳が他の足音を聞いていた。

案の定、ヴァジュラが来た。

オウガテイル3体を倒したヴァジュラは食事に取り掛かった。

まあ、そんな事はさせないけどな。

その後、少し手間取ったが無事討伐完了。

まあ、ソーマやサクヤとは長い付き合いだし大型一匹なんざ問題ないがな。

そんじゃ捕食と行くか。

神機を捕食形態にしてヴァジュラの死体を喰らう。

おっと、コイツは…

「おっと、レア物だな。」

「戦果は上々って所ね。」

サクヤが言う。

「また、榊のおっさんがはしゃぎそつだ。」

そんなどうでもいい会話をしながら岐路に着こうとする俺たちに、オペレーターから連絡が来た。

「墳罪の町に更なる荒神反応！数は1、ボルグ・カムランだと思われ  
れます。」

おいおい、調査隊は何やってんだ？

「おい。サクヤ、ソーマ。メインディッシュのトウモロコシの前にサ  
ソリの前菜だよ。」

「え、お腹すいたんだけど。」

「ふん。さっさと片付けるぞ。」

「じゃあ、行くか。」

その時は気がつかなかった。

この時から俺とあのおっさんの運命の歯車が回っていた事に……

伊達SIDE

ええええええ！

火野、アンコそれに後藤ちゃん！？

一人でゲームやってたからって、何でこんな怪物と戦う事になるの！？

誤るから、許して！！

「って、漫才やってる場合じゃないか。」

コイツは荒神だ。

寝る前にやっていたあのゲームの怪物だ。

どうするか？

逃げる？ゴッドイーターだって追いつかれちまうような奴に？

死ぬ？いやいやいや！一億円ため終わったし、死んでもいいか……  
みたいな終わり方は嫌だ！

なら、戦う？俺は、ゴッドイーターでもなけりゃ、仮面ライダーバースでもないのに。

ん？あの怪物の後ろの段差にあるケースは？

其処に見えたのは、あのバースのマーク！

「じゃあねえ。お仕事だ！」

俺はボルグガムだっけか？そいつの下をスライディングで潜り抜ける。

そして、ケースを急いで開ける。

其処に入ってるのは、ベルトと銃！

「って、セルメダルなきや使えねえじゃねえか！」

うん？手紙？

～～手紙 伊達君へ～～

この手紙を見ている時は、きっと君が異世界にいた時だろう。

これは、バース吸収型だ！すべての武器がオラクル細胞を吸収するようになっているんだ。

それと、変身に必要な物は気持ちだ！！欲望だ！！

君の気持ちに反応して、オラクル細胞はセルメダル、いやオラクルメダルを作るだろう！！

異世界への出張：頼んだよ伊達君！！

～～会長より～～

おいおい、出張とか聞いてないよ！？



てか、異世界！？薄々感じてたけど異世界！？

まあ、変身しないとまずいのは分かってるんだからやってみるか。

俺は、何時かの様に指で何かを弾く振りをする。

その振りはそのまま、現実となる。

そして、俺が手で掴む頃にはメダルになっていた。

「変身！！！」

カポーン！

どこか、間抜けな音が鳴り、その後機械的な音が鳴って変身が完了する。

「さて、いつちよ行くか！」

てか、ボルグガム………待っててくれてありがとう。

ゲームだと回復してる途中に攻撃されるからね。

「これでもくらいな！！！」

銃を乱射する。

銃は当てるものじゃない、撃つものだ！！

「おりゃああああ!!」

俺の撃つと言う欲望から、オラクルメダルが勝手にリロードする。

てか、威力ありすぎだろ!

一発当たるだけで、ボルグガムが下がってるじゃん。

つつか、足も、盾も、尻尾もぼろぼろだし。

強すぎるだろ……世間じゃチートっていうんじゃないか?

「まあ、こつちも命がかかってるからな。悪く思つなよ。」

『セルバースト!』

銃口に弾装?抑える所?を着けるとエネルギーが充電していく。

「ファイアー!!」

そして、一気に解き放つと……

バーーーーーン!!!!

爆発して、ボルグガムはコア?だけ残して消えた。

「これがコアだよな?放置すると復活するらしいし壊しとくか。」

手で粉碎する。

「さてと、これからどうしよう?」

「動くな。」

俺は、ドでかい剣2本と銃に囲まれてた。

「ほんと、どうしようかねえ?」

ゲームと現実と荒ぶる神（後書き）

伊達さんの運命はいかに！？

感想、待ってます。

## 出張とアナグラと誕生

〳〳伊達の手術成功後〳〳

会長SIDE

私は一人の青年と話していた。

「では、約束通り伊達君を君に貸そう。」

「ありがとうございます。」

その約束とは、伊達君の手術が無事成功するようにする事。

その代わりに、リハビリを兼ねて異世界に伊達君を出張させる事。

「では、僕はこれで失礼します。」

「ああ、伊達君をよろしく頼むよ。渡君。」

「はい。」

そう、彼の名は紅渡。

「さて、もう内の社員じゃないのにすまないね。伊達君。」

新しい旅の始まりだよ!!!ハッピーバースデー!!!!

伊達SIDE

「で、アンタ何者だ？」

俺に、剣を突きつけてるゲームのキャラが質問してきた。

ちなみに、俺はバーストのストーリーを終わらせたぜ。

てか、怖いからそれ降ろせ！！

「俺は、伊達明。よろしく！」

とりあえずフレンドリーに接しておこうか。

「ああ、俺は兩宮リンドウ。こっちが、橘サクヤでコイツがソーマだ。」

自己紹介するのはいいけど……

「あの、何で武器を突きつけてくるのかな？おじさん怖いんだけど……」

「ああこれね。とりあえず、俺達に着いて来るか、此处で死ぬか選んでくれ。」

「ええええ…それって脅しじゃん。」

「ああ、そつとも言うな。」

「馬鹿やってないでさっさと済ませるぞ。」

ソーマだっけ？が口を開く。

「で。何で武器突きつけてんの？」

「いやな、あんたが戦ってる所見てたんだ。俺達。そして、荒神を  
あつという間に倒したアンタの事を警戒してるって事だ。」

まあしょうがないか……

「これで良いか？」

俺はベルトのメダルを抜いて変身を解除する。

「おう、それでいい。まあ、詳しい話はアナグラにもどってからに  
するか。」

よかった、警戒解けた。

「まあ、行く当てないしよろしく頼むわ。」

「後、そのベルトも一応預かってくわ。」

「まあ、後で返してくれよ。」

「大丈夫だよ。神のおっさんがはしゃぎそつだけどな。」

その後、ヘリに乗ってアナグラに戻った。

くくアナグラくく

「す、凄い！！オラクル細胞を凄い密度で発射できるようになっている！！」

榊だっけ？この、博士がバースバスターやら、ドライバーやらを調べた結果。

俺の撃った弾は常にリンクバーストLv2位の威力らしい。

確かに、そんな物連射すればあっという間に結合崩壊できるな。

「でも、このドライバーに使われている材料はこの時代では絶対取れないから量産は無理だね。

こんな物を連射すれば神機が壊れてしまうからね。

にしても、こんな物を撃つても平気なんて余程、その鎧が高性能なんだね。」

「でも、バースの着用者は訓練している奴なら使えるようになってるんだぜ？それに、何時ものとなんか変わらなかつたしな。」

「ヨハン、この武器については一番詳しい伊達君に持たせたほうが良いと思うけど。」

シクザール支部長：この人は自分を犠牲に出して命を救おうとするどころか、火野見たいな奴だ。

無印のラスボスなんだが……どうしようかねえ。



「ああ、そうしよう。それで、此処からが本番なんだが伊達君。君は、仮面ライダーバースとしてこのフェンリル極東支部で働かないかね？  
いきない、この異世界からこの世界に飛ばされたと聞く。きっと、食料も寝床もないのだろう？」

このアナグラに、住める様に手配しよう。それに、明日から新人が二人来る。その新人達と合わせて訓練もできるしね。」

「そうですか。それじゃあお言葉に甘えて。俺伊達明は、フェンリルにお世話になるうと思います。」

「そうか。では空いている部屋がたしか、新人区画にあったはずだ。ペイラー。」

「えっと、106室が空いてるよ。」

「では、この鍵を持ってくれ。それと、一応君の適合率も調べてみようか。」

「ええ！ゴッドイーターになるの！？」

「まあ、適合率だけ調べてみようと思う。」

「今調べ終わったけど、凄い……！適合率はソーマ君とほぼ一緒だ……！」

「そうか。なら君の神機を用意しなくてはならないな。」

そう支部長が行った時に、何かが飛んできた。

『キエエ！キエキエ！！』

「あれ？タカちゃん達？こんなとこに何のよう？」

見ると、プレゼント箱と一緒にモニターを持っている。

「つーか、よく持ってるな。」

「なんだこの鳥は！？」

そして、モニターが着いた。

そして、予想通り会長が映った。

『伊達君！久しぶりだねえ。手術は成功したみたいだね。』

「会長、なんのようですか？」

『君に出張させたお詫びに君に神機を持ってきたよ！これを受け取ってくれたまえ！』

「つーか、帰らして下さいよ。」

『それはできない。何故なら君を治してくれた医者との約束なんだよ。それでは、ゴッドイーター伊達の誕生だよ！！ハッピーバースデー！！！！！！』

そして、モニターが消えた。

「な、なんとも愉快的な会長だねえ。」

榊博士は少し引いたみたいだ。

「な、何はともあれ。この神機は君の物だ。人類の平和の為にがんばってくれたまえ。」

支部長は少しだけ動揺したみたいだな。

「まあ、がんばりますか！」

こうして、俺にゴッドイーターの仕事が増えた…(TOT)

出張とアナグラと誕生（後書き）

伊達さんがゴッドイーター…

まあ、何とかなりそうだけど（笑）

## 新型と旧型と特殊型！？

### 伊達SIDE

おっす！皆が大好き、伊達明だ！

アナグラのベットで一晩を過ごした俺だが、今あのどっからどうみても拷問にしか見えない適合試験を、させられそうになっている。

「後藤ちゃん…まじで助けて…」

注射は怖くない元医者俺だけどこれだけは絶対痛い。

てか、痛くなかったら化け物だけだな。

『では、準備ができたならそのケースの前に立ってくれ。』

死刑宣告じゃん。

でも俺は伊達明だ！！

「ヤケクソだ！」

その、銀色と緑色の神機を掴む。

そして、次の瞬間！

バゴン！！！！

ケース？のフタが降りてきた。

痛ってええええええ！！

叫ばない俺をほめて欲しいね！そんなぐらい痛いんだよ！！

キューン、パタン！

あ、やっと終わった。

試しに神機を持ってみると、其処まで重くなかった。

これがゴッドイーターの力か！

『適合おめでとう。君が世界初の【特殊型】ゴッドイーターだ。』

そう。特殊型。

俺の神機はオラクルメダルを入れる事によって、【クレインアーム】、【ドリルアーム】、【シヨベルアーム】、【カッターウイング】の四つが使えるようになる。

といっても、威力、出力共にバースの半分程だけだな。

ちなみに、この神機は俺以外と適合しないらしい。

会長は真木博士以外の誰にこんな物作って貰ったんだ？

『この後は、メディカルチェックが予定されている。その、扉の向こうで待機していてくれたまえ。』

その後、俺は試験室を後にした。

〳〳待機部屋〳〳

新人SIDE

俺の名前は芹川<sup>せしかわ</sup>アラン。この支部で始めての【新型】らしい。

今は、俺と同じ適合者のコウタと一緒にこの部屋で待機していた。

しばらくすると、30代位の男性が入ってきた。

そして、声を掛けてきた。

「よ！お前等も適合者か？」

「はい。そうですよ。」

俺は質問に答える。

「じゃあ、アンタも適合者か？」

コウタが質問する。

「ああ、俺の名前は伊達明！【特殊型】のゴッドイーターだ。」

「俺は、芹川アラン！【新型】ゴッドイーターらしい。」

「俺は、藤木コウタ！【旧型】らしいけど、宜しく！」

「ああ、これからよろしく頼む。」

自己紹介を終わらせてから、数分後に厳しそうな女性が来た。

そして、俺達の前に来た。

「立て。」

「え？」

「立てと言っている。さっさと立たんか！」

「「「はい！」「」」

その後、メディカルチェックの順番を聞かされて、解散した。

〳〳入隊3日後〳〳

#### 伊達SIDE

俺はついに実践投入される事になった。

アランは大丈夫そうだが、コウタの奴は心配だな。

まあ、俺もドクター（榊）の講座は少ししか聞いてなかったけどな。



で、今回の任務は【悪魔の尻尾】、トカゲちゃん、どつちかと言うと恐竜です。」を1体討伐する任務だ。(アランちゃん、ナイスフオロー！)(ツッコミです。)

でも、出るのは俺とリンドウちゃんとアランちゃんの3人だ。

コウタは、ツバキさんに「お前はもっとみっちり訓練してからだ！」って言われて訓練室でがんばってるらしい。

お、リンドウちゃん来たな。

「あ、リンドウさん。支部長が見かけたら、顔を見せに来いって言うてましたよ。」

「オーケー。見かけなかったことにしてくれ。」

これ位余裕がある奴ってリンドウちゃんだけだよな。え？俺も余裕あるだろって？俺はふざけてるだけだよ。マジで。

「ま、とつと背中を預けれるぐらいに育ってくれ。いいな？」

話は終わったみたいだな。

てか、サクヤちゃん来なかったな。

〳〳墳罪の町〳〳

リンドウSIDE

伊達さんと新型の新人に3つの、いや4つの命令を教えるからオウガテイルを狩らせに行かせた。

新型は、銃に変えて撃ってるな。

伊達さんは……

何じゃありゃ！？

俺が見た物は、伊達さんの神機がドリルに変わっていてオウガテイルに突き出す瞬間だった。

伊達SIDE

おっし！いつものヤミーやグリードと戦っていたみたいに、このドリルを突き刺せば……！

あれ？待てよ俺。コイツは生物だ。グリードみたいにメダルできてない。細胞でできてる。

待て！止まってくれ俺の腕……！！

「「「ギヤアアア……！！」「」「」

トカゲちゃんの悲鳴とリンドウちゃんの悲鳴に、アランちゃんと俺の悲鳴が木霊した。

だって、だって……

ドリルが刺さってる所から、ものすごい勢いで血が出てるんだぜ！？  
いくら俺が医者でも怖いぞこれは！！

って、怖がっている間にトカゲちゃん死んじゃったよ…

ドリルアームは真っ赤だぜ？

俺の服も真っ赤だぜ？

どっかの、振り切るライダー位真っ赤だぜ？

アランちゃんリバーズしちゃったよ。

リンドウちゃんも驚いちゃってるよ。

もう、会長少しは考えて作れよ！！！！

〓〓その後クレームが来た会長は…〓〓

「里中君！私はドリルアームのほうは頼んでなかったと思うがね？」

「あ！それ私が付ける様に頼みました！だめでした？」

「いや、付けたいという欲望！すばらしいいいいい！！」

「「「いやいや、全然良くないからね！！？」」「」

新型と旧型と特殊型！？（後書き）

これから、ドリルアームはいらなくなるんじゃないかな？（笑）

## エリックとソーマとラーメンちゃん

### 伊達SIDE

あの、ドリル惨殺殺神事件の翌日。

今回は、アランちゃんがサクヤちゃんと一緒にコクーンラーメンだっけ？を狩りに行った。

俺は、ソーマとエリックの3人で小型荒神軍団と戦う事になった。

てか、あのエリック……大丈夫かな？

余裕があったら助けよう。

〳〳鉄塔の森〳〳

俺が着く頃にはもう2人は待っていた。

「やあ！僕はエリック。エリック・デアIIフォーゲルヴァイデ。貴方も人類の為、僕のように華麗に戦ってくれたまえ。」

すると、ソーマがトカゲちゃんの気配に気づいて叫ぶ。

「上だ！エリック！」

パーン！

「え？」

「戦いつてのはこれ位、突然で泥臭くなる方が俺好みだぜ。」

持ってきておいた、バースバスターでトカゲちゃんを撃つ。

「ぼやぼやするな！」

トカゲちゃんを切ったソーマが俺達に叫んでいた。

周りは、トカゲちゃんだらけだった。

「分かってますよ。行くぞ、エリックちゃん？」

「え、あ、うん！僕の華麗なる戦いを見せてやる！」

俺は神機にメダルを入れる。

チキン！カポーン！

『カッターウイング！』

「でりゃあー！」

カッターウイングをブーメランの様に飛ばして3匹のトカゲちゃんを切り刻む。

「ふん。少しはやる様だな。」

ソーマちゃんが褒めたのか？ただの独り言か？

「誰が、ソーマちゃんだ！！」

アソコみたいに怒るなよ。

〃〃真木博士の屋敷〃〃

「俺はアソコだ！」

「…どうかしましたか？」

「いや、空耳だ…」

〃〃戻って、戻って〃〃

「次は、コクーンラーメンか。」

「コクーンメイド、いやこのおっさんにツッコむのは疲れるからやめて置こう。」

ソーマちゃんが、無視をし始めた。

「だから、ソーマちゃんじゃねえだろうが！」

だから、怒るなって。

「さてと、ラーメン2人前を狩るぜ！」

俺はもう一度メダルを入れる。

『クレーンアーム！』

「んじゃ、引つ張ってやるぜ！」

クレーンアームの先端を飛ばして、繋いでいるロープでラーメンを雁字搦めにする。

「おっりゃあ！！！」

コクーンちゃんはスポって取れて、2人の前に転がる。

「も、もうデタラメだねえ……」

「慣れる事をオススメする。」

エリックちゃん、ソーマちゃん早く倒して！

「…もう、どうでもいい。」

コクーンちゃんはあるとついでに討伐完了した。

～～～帰りの車の中～～～

「いや～、貴方のお陰で助かったよ。ありがとうございました。」



エリックちゃんにお礼を言われた。

「ふん。元はといえばお前の不注意だ。」

「まあ、過ぎた事はしょうがないじゃない？」

「うち。お前はどんな覚悟で此処に着た？」

「俺は……、他人に巻き込まれただけだ。」

「ふん。不幸な事だ。」

それは言わないでよ、ソーマちゃん……（TOT）

エリックとソーマとラーメンちゃん（後書き）

今回はすこし短いです。

にしてもソーマちゃん…（笑）

## コンゴウとコウタとリンクバースト

伊達SIDE

今回は、ついに中型荒神のコンゴウちゃんと戦う事になった。

メンバーはコウタちゃんとアランちゃんと俺。

何で新人3人だけでコンゴウなんだ？つと、ツバキさんに聞いたら、

「コウタは張り切ってはいるが、講座や訓練に集中出来ないんだ。それに、もう2回程撤退した事がある。お前達とミッションに行けばもしかしたら、力の差を埋めたいって考えるかもしれん。」

なるほど。モチベーションの向上のためか。

よし！働いてきますか！

集合場所にはもうすでに2人が待っていた。

「あ、伊達さん！今回のミッションは俺たち3人だよ！誰がコンゴウに止めさすか勝負しない？  
夕飯の配給品一つ賭けてさ！」

……落ち込んでるつとツバキさんは言っていないが、元氣有りまくりだろー！！

もしかして、履歴とか気にしないのか？

「そうだな、俺はプリンのレーションを賭けよう。」

甘いもの苦手だしな。

「じゃあ、俺はジャイアントトウモロコシの半分。」

アランちゃんは小食だからねえ。

「じゃあ俺は、おでんジュース！」

よし！絶対勝とう！

こうして、コンゴウ+ を狩りに出かけた。

〓 鎮魂の廃寺 〓

「トカゲちゃん発見！」

「だから、恐竜です。」

「いや、オウガテイルだから！」

最初に、トカゲちゃんを3体討伐している俺達。

因みに、台詞の順番は俺（ボケ役）アランちゃん（ツッコミ役）コウタちゃん（ツッコミ役・ボケ役）だ。

「コイツで最後だ！」

最後のトカゲちゃんを神機で叩いて終わり。

因みに俺の神機、武装しないと銀色と緑色のでかい棒だ。

威力は、粉碎属性の300だ。

「とまあ、雑魚は終わったけどコンゴウは何処にいるんだ？」

コウタちゃんが言う。

「知らないよ。とりあえず、分かれて探そう。見つけたら信号弾を打ち上げる。」

「OK！」

「うん！見てくるよ。」

さてとどうなるかねえ？

## コウタSIDE

俺は神機を構えながら歩く。

何処に居るんだコンゴウの野郎？

ん？おお、小さな木像じゃん！高く売れるらしいし持ってくか！

俺は神機の中に小像を入れた。どうやって入ってるんだ？

ん？

ド、ド、ド、ザ…

足音？

コンゴウか？

俺は壁に寄り掛かりながら観察しようとする。

でも、足元の小石が足に当たっちゃまった！

コロッ。

やべえ！

コンゴウは耳が異常に良い。

これじゃ、気づかれた！

「ウゴオオオオ！！」

し、信号弾だ！

バン！

〜伊達〜

「あ、信号弾！コウタちゃんの方だな！」

くくコウタくく

「だ！くえ！」

敵に攻撃しながら回避しているけどこれじゃあ体力で負けちゃうよ！

「コウタ！」

「おい！大丈夫か！？」

「アラン！伊達さん！」

よしゃあ！これで勝てる！

伊達SIDE

「んじゃあ、行くか！」

『シヨベルアーム！』

俺の神機はシヨベルを装備した。

「スタングレネードだ！目をつぶれ！」

アランちゃんが、グレネードを投げた。

そして、コンゴウは光と音に怯えた。

「喰らえ！」

「だりやあ！」

アランちゃんは捕食して、俺はシヨベルアームで腕を挟み潰した。

そして、腕は結合崩壊した。

「相変わらずむごい攻撃ですね、伊達さん……」

「気にしない、気にしない。」

アランちゃんは銃に変えて俺とコウタにアラガミバレットを撃った。

「おお、これがリンクバーストか！」

力がかなり上がったな。

「すげえ！」

そうだな。

『伊達君！！』

「ええ！？」

何で会長の声が！？



『この神機が初めてリンクバーストする時にこの音声の流れるようになっている。』

そうなんだ。

『リンクバーストしている時に、装甲を展開した状態でメダルを3枚入れるとブラストキャノンパワーマックスで撃てる様になっている！ぜひ、活用したまえ！！』

つて、説明聞いている内に2人ともピンチじゃん！

「迷ってる暇はないしか！アランちゃん！トラップしかけてくれ！コウタは回復に専念してろ！」

「分かりました！」

じゃあ、俺も！

カチャン、カチャン、カチャン！

カポーン！

『ブラストキャノン！』

「充填完了！アランちゃん、コウタちゃん！離れる！」

コンゴウが、痺れから立ち直った。

「ブラストキャノン…ファイアー！！！！」

装甲に着いてた銃口から、赤い光線が飛び出る。

そして、コンゴウちゃんはコアだけ残して綺麗に消滅した。

「おっしー!!」

「はあ、相変わらずデタラメだ…」

「なんか、俺の意味ってあったのか？」

その後、アナグラで俺はおでんジュースをおいしくいただいた。うん！うまい！

コンゴウとコウタとリンクバースト（後書き）

おでんジュース……おいしいのかな？

シュウとメダルとおでんジュース(前書き)

ようやく伊達さんの目的が明らかになります。

## シュウとメダルとおでんジュース

伊達SIDE

1ヶ月に一回、ここフェニル極東支部には自動販売機のランキングが張り出される。

6位以下の商品は新しい商品と交換されるらしい。

5位 辛味噌ジュース 68本

10位 おでんジュース 30本

なお、商品の交換は3日後の最終更新の順位で行われます。

何…だ…と…!?

こうして俺、伊達明の必死の3日間が幕を開けた。

くくグボロ・グボロ戦くく

俺はグボロ・グボロを見つける前から、

『セルバースト!』

バースバスターの充填を開始した。

そして、充填開始5分後にはグボロ・グボロを発見した。

「じゃあな!!」

引き金を引く。

「ファイアー!!」

グボロ・グボロは相手すら見えずに（派手に）暗殺された。

（～コンゴウ+雑魚戦～）

『ドリルアーム!』

「ちょ、ちょっと伊達さん!」

「何よ、アランちゃん?俺急いでるんだけど?」

「だからって、開始5秒でドリルアームを着けないでください!!」

「硬い事言っなって!!」

ドリルの先端をサイゴートの口の中へ突っ込む。

あ、歯が飛んできた。

あ、貫通した。

「あ、アランが言った事って本当だったんだ。オエ……」

「……………俺なんかよりよっぽどの化け物だ……」

「おい、ソーマちゃん、コウタちゃん、アランちゃん？」

「こんな所で吐かないでくれよ。」

「……アンタ（お前）の性だろうが……！」「……」

「あ、コンゴウいたな……！」「……」

「……はあ……」「……」

開始から2分と言う異常なタイムで倒した。

……二日後……

今日はリンドウちゃんにシュウー体の討伐を頼まれた。

「さて、稼ぎますか！」

「おでんジュースの存亡の為に！」

……煉獄の地下街……

「……やっぱり暑いねえ……」

でも、やるしかないか！

『伊達さん！シュウの反応をキャッチしました！南1km先からこちらにきています。』

「OK！ありがとうヒバリちゃん！」

通信機を切り、シュウの方へと向かう。

その後、直ぐにシュウを見つけた。

しかし、ここで俺が想像出来なかった問題が起こった。

俺はシュウを見つけた瞬間素早くカッターウイングを投げつける。

しかし、カッターウイングは命中するも弾かれてしまう。

「硬いな！」

『ドリルアーム！』

「でりゃあー！」

掛け声と共にシュウにドリルが突き刺さる。

ガン！

筈だった。

「何！？」



ドリルの先端が壊れていたのだ。

「グアアア!!」

シウは連続で気弾を飛ばしてきた。

それを避けるが、予想以上に速かった為に何発かは掠る。

「ぐっ!!」

拙いな…このシウは強い。否、強すぎる…。

確かにゲームじゃ硬かったが、ドリルアームが折れるほどじゃない筈だ。

しかたない。此処は変身だ!

チーン!

メダルを弾き、

パシ!

手で取り、

チツキン!

ベルトに入れ、

キィ、キィ、カポーン！

ハンドルを回して、

ウィン、ウィン、ウィーン！

機械的な音を出しながら鎧が装着される。

「さうて、お仕事だ！」

素早く接近して殴る。

「たあ！おりゃ！」

どうやら、効いている様だ！

「ならコイツだ！」

『ドリルアーム！』

「おりゃあああ！…！」

ガーーーーー！！！！

おっし！刺さってるな！

「ゲウウウ！！！」

シュウは手を下に突いた。

っげ！拙い！

俺は素早くシユウから遠のく。

すると先に居た場所から気？見たいな物が爆発した。

あぶねえな！

「じゃあ、こいつで決めてやるよ！」

『セルバースト！』

「充填完了！ファイアー！！！」

俺はシユウに銃口を向ける。

「グウウ！？」

シユウがこちらに気づいたが、銃弾は目の前にあった。

バーン！！！！

大爆発を起こして、シユウはコアだけ残して綺麗に消滅した。

つと、思ったら…

「なんじゃこりゃ？」

残っていたのは、手のひらぐらいの大きさのセルメダル（タカ）だった。

くくアナグラ ラボラトリくく

「これを調べてみたら、非常に強い荒神のコアであることが分かったんだ。」

「そうか。それでドクター、他に変わった事は？」

「どうやら、これが原因らしい。」

ドクターが取り出したの是一片にセルメダルだった。

「それはどうやって？」

「これはねえ。コアを調べてる途中に一枚だけ出てきた物だ。君の使うメダルにそっくりだ。」

「ドクターそれ調べるの頼むわ。」

「任せてよ。これだけのエネルギーが圧縮されてるんだ。もしかしたら、神機使いにとって使えるものになるかもしれないしね。」

「じゃー！よろしくー！」

「ああ、そうそうこれだけ強いシュウを倒せたんだ。ボーナスだよ。」

もらったのは、フェンリルクレジット3000fc。

「ああ、ありがとうドクター！」

〜翌日〜

1位 冷やしカレードリンク 100本

2位 猫舌用冷やし抹茶 89本

3位 おやつさんのコーヒー 76本

4位 天の道鯖味噌ジュース 71本

5位 おでんジュース 69本 **ここ重要！**

「おっしやああ！！！」

伊達さんは泣いて喜んだらしい。

## シュウとメダルとおでんジュース（後書き）

次回、伊達さんが呼ばれた理由が明らかに…！？

## 目的と理由と新たな新型

### 伊達SIDE

あのセルメダル型のコアをドクターが調べ始めた翌日、会長から呼び出された。

『伊達君！君に言ってなかった事が幾つか有る！』

まず、1つ！！この私が居る世界での1日は、君の世界の1週間分だ！つまり最初の会話から私の世界では3日、君の世界では3週間だ！！』

なんと言う好都合だそりゃあ？

『次に、2つ！！君をその世界に送ったのは彼だ！！』

モニターが会長から、あの俺の脳の中の弾丸を取り除いた医者に代わった。

『お久しぶりです、伊達明さん。』

「あゝあ、あん時の兄ちゃんか。っで、なんで俺なんかを呼んだの？」

『それが、君に言っていなかった事の3つ目に繋がるのだよ！！彼が君に出張を頼んだ理由は、その世界に紛れ込んだ赤、青、緑、黄色、灰色、紫、そしてコブラ・カメ・ワニの21枚のセルメダルの

回収だ！！」

「だ〜から〜、何で俺なの!？」

『すみませんね。仮面ライダーなら誰でも良かったんですけど、他の世界の仮面ライダーでゴッドライダーをプレイしている方は全員居ないんですよ。だから、貴方に頼んだんですよ。』

「因みに、他にゴッドライダーをプレイしている仮面ライダーは？」

『仮面ライダーカブトさんにガタツクさんに、僕自身であるキバ、それと電王のイマジン達にそのたもろもろですね。』

「結構居るんだね。ってか、あんたもやってんのか!？」

『はい。ですが、僕は平行世界の管理者なのでここから出れません。』

「理由は理解できたけど、そんなにあるのかよ〜!てか、ヒントくれないと見つけられないじゃん。」

『では何枚か確認できてますので教えます。ハガンコンゴウにサイとゾウ、グボロ・グボロ極寒型にシャチとウナギ、クアドリガにゴリラとクジャクです。』

「どの?」

『詳しくは分かりませんが、ハガンコンゴウは愚者の空母、グボロ・グボロは鎮魂の廃寺、クアドリガは憤罪の街です。いつ出てくるかまでは分かりません。』



「わかりましたよ。やりますよ。」

『頼みます。』『がんばりたまえ！伊達君！』

しゃねーか！

（数日後）

「どうも。アリサ・イリーニチナ・アミエーラです。」

アリサが転属してきた。

アリサ、新型神機の適合者でオオグルマに洗脳されて、リンドウちゃんを事故で荒神と閉じ込めちゃう事になる。

これも、頭の痛い問題だ。

俺は医者だが、精神科についての知識は皆無だ。

洗脳は解けないだろ。

そんな事を考えているとアリサの紹介が終わった。

「では、これより新人アリサは、アラン、伊達、そしてリンドウと一緒にシュウ2体の討伐を行ってもらおう。集合時間は2時間後だ。では各自、任務に当たれ！」

その後、解散となった。

くく憤罪の街くく

俺達は、スタート地点からリンドウちゃんのありがたい言葉をもらっていた。

「今回は、新型2人に特殊型とお仕事か。まあ、足を引っ張らないように気をつけるんでお手柔らかなにな。」

冗談きついで、リンドウちゃん。この中で一番戦闘経験有るのリンドウちゃんじゃん。

「旧型は、旧型なりの仕事をしてくれればいいんです。それと、貴方は特殊型だからって浮かれないください。」

これはきついで！

「はは、まあよろしく頼むぜ？」

「ぎゃああ…！」

リンドウちゃんがアリサの肩に手を置くとアリサは飛び下がった。

「おおおう、余程嫌われたみたいだな。」

「い、いえ、問題ありません…！」

「そうか。アリサ、混乱しちまったときにはな。空を見る。そして、動物の形をした雲を見つけてみる。落ち着くぞ。」

「はあ……」

「じゃ、見つかるまでアリサは待機。伊達さん、新入り、行くぞ。」  
その後、俺は2人と離れてシュウを探した。

〳〵10分後〳〵

『こちらリンドウ。シュウを1体見つけた。そのまま戦闘に入る。』  
通信機からリンドウちゃんの声が聞こえる、つと。

「こちら伊達。こっちも見つけた。合流させない様にこのまま戦つ。」

『了解。アリサと新入りはそれぞれ伊達さんと俺に合流しろ。』

『『了解。』』

「さてと、いっちょやるか！」

『クレーンアーム！』

「更に！」

『ドリルアーム！』

クレーンアームの先端にドリルが着く。

「おつりゃあー!!」

ドリルはクレーンアームの磁力と紐で繋がれた状態でシュウに飛ぶ。

「グオオ!?!」

シュウに刺さり、オラクル細胞を吸収する。

「着きました……た?」

「おう、アリサ! 援護を頼む!」

「……了解……です……」

何でこの程度で気持ち悪くなるんだ?

伊達さんはすでに慣れていた。

## 目的と理由と新たな新型（後書き）

さて、重大なイベントの前まで来ました。  
どう書こうかな？

### アンケートと質問

皆様に質問とアンケートをとりたいと思います。  
質問は、皆様がゴッドイーターOrバーストをプレイして、かつこ  
いい！または、笑ったトップスとボトムス、髪型の組み合わせを教  
えてください。

因みに、作者はダスキーモッズ上下セット（ソーマの服装）+ヘア  
スタイル24のカラー7です。

アンケートは他の仮面ライダーオーズのキャラをゴッドイーターの  
世界に送りたいので、以下の中から選んでください。

- ? 主人公の火野
- ? ベストパートナーの後藤さん
- ? グリードの頭脳アंक
- ? てか、いらないだろ
- ? 他の仮面ライダー

の中から選んでください。

もし、?が多かったら作者が適当に選びます。

ヴァジュラとリンドウとえ？俺も！？（前書き）

アンケートの中間報告

?	?	?	?	?
0	0	1	1	0

締め切りは、日曜日（8月28日）まで。

ヴァジュラとリンドウとえ？俺も！？

伊達SIDE

シュウ2体のミッションから、数日が過ぎた。

今回のミッションは、俺、リンドウちゃん、アリサのまさかの3人ミッションだ。

荒神の反応が多いらしい。って、他の4人は先に行ったよね？

もしかしくなくても、俺もリンドウちゃんと一緒に消されるのか？

ハハハハハ……助けて、後藤ちゃん……

〳〳 懺罪の街〳〳

「せいやー！」

「はあー！」

「だあー！」

俺達は今6体ほどの雑魚を狩っているが大型荒神が見つからない。

「ん？どうした？」

「いえ、何でもありません。後方、前方、共にクリアです。」

「あ、ああ。」

しかも、もう壊れた教会の入り口近くだよ。

って、もう来ちゃたよ。

「お前らっ?」

リンドウちゃんは驚いてるよ。

「リンドウ!?!どうして2つのチームが同一企画に!?!一体、どう言う事!?!」

「おっと、話は後にしよう。俺らは中、お前らは外を見張っててくれ。」

俺とリンドウちゃんとアリサは教会の中に入っていった。

~~~~教会の中~~~~

俺達が入って沈黙が続くが、それはヴァジュラのメス?が沈黙を破った。

「アリサ!後方支援を頼む!」

「んじゃあ、お仕事だ!」



しかし、アリサは動こうとしない。

ウホー！ウホー！ウホー！ウホー！

ゴリラちゃんのメダルセンサーに反応有り！？

「変身！」

俺は急いで変身した。

「いくぜー！」

その後は、リンドウちゃんは神機切りつけて、俺はバースバスターで撃ちまくった。

「アジン…ドウヴア…トウリー…！」

アリサがつぶやき始めた。

そして、

「いやああああ…！やめてー…！」

その声を聞いた瞬間、俺はリンドウちゃんをアリサの方にブン投げた。

リンドウSIDE

今回の任務はいろいろとおかしい。

新種のヴァジユラ、アリサの状態、そして何よりも、

伊達さんが俺を投げた事。

アリサの「いやあああああ!!」と言う叫び声が聞こえた瞬間、伊達さんは俺を投げた。

そして、アリサは銃弾を天井にぶつけた。

その天井は崩れて、俺が居た所と今居る場所は瓦礫によってふさがれた。

伊達さん……………アンタ、この事を知ってたんじゃないのか？

「アリサ！貴方を!?」

サクヤと新入りがやってきた。

「リンドウ!?どうなってるの!?!」

「伊達さんが道をふさがれる前に俺をここまで投げた。たぶん、今も中で戦ってる。」

「そんな!」

新入りは銃で壊そうとするが、弾は瓦礫を壊せない。

すると、中から声が聞こえてきた。

「おーい！俺は平気だ！コイツを倒しておくから支部長に頼んで給料上げてくれ。」

「伊達さん！ふざけてないで逃げて！！」

新入りが叫ぶ。

「安心しろ！俺は仕事の途中に寝たりしねえからよ！」

「伊達さん！」

俺は立ち上がった。

「サクヤ、アリサを頼む！俺とソーマと新入りは時間を稼ぐ！コウタはサクヤの護衛だ！」

「でも、リンドウさん！！」

「うるせえぞ新入り！これは上官命令だ！！」

「でも！！」

俺が新入りに怒ろうとした瞬間、

「アランちゃん！俺は平気だ！勝手に殺すな！コイツは俺が倒す。だから安心して逃げろ。」

「でも、伊達さん！！」

「給料の心配なら、俺が奢るから早く！」

「そうじゃなくて……！」

「いいから、さっさとその瓦礫からどけ……！」

その叫び声と同時に機械的な音が流れる。

『セルバースト！』

「充填完了！ファイヤー……！」

俺は、伊達さんの叫び声と同時に新入りを引っ張って瓦礫の山の近くからどかした。

ドカーーン……！！！！！！

その後、赤い光線が瓦礫の山を吹っ飛ばした。

そして、

「ああ、ああ終わったぜ……！！！」

のんきな感じで伊達さんが出てきた。

………シリアスブレイカーってこいつ奴の事を言うのだろう。

ヴァジュラとリンドウとえ？俺も！？（後書き）

どんなに悲しい場面でも、どんなにつらい場面でも、伊達さんが居れば一気に解消！流石は、シリアスブレイカー！

## 無事とメダルと疑惑（前書き）

気がついたらすでに仮面ライダーオーズの最終回間近！？  
この小説どうなるんだろう……

（一応、作者は完結を目指すつもりです。）

アンケート

|   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|
| ? | ? | ? | ? | ? |
| 0 | 0 | 1 | 1 | 1 |

もし一位が2つ以上だった場合は、  
火野<<<後藤さん<<<アंक<<<その他<<<いら  
ない  
この優先順で選ばれます。

## 無事とメダルと疑惑

閉じ込められた伊達SIDE

瓦礫によって退路を立たれた俺は、とにかく目の前のヴァジュラメ  
ス？と戦う事にした。

にしても……顔が不気味だねえ

優美（オーズ23話のヤミーの親）が作った薬でも顔につけりゃ、  
美人になれるぜ？

荒神に効くかは知らないけどな！

「んじゃあ、いくぜ!!」

テイ、テイ、テイ、ティン!!

コインがを弾く様な音と共に銃弾が敵に向かって飛ぶ。

それが全てヴァジュラメスに当たる。

そして、武器を変える為にメダルをベルトに入れる。

『ドリルアーム!』

「であ!!」

超高速で回転するドリルはオラクルの結合を崩壊させ、さらにオラクル細胞を吸収していく。

吸収……つまりは、オラクル細胞を引っ張ると言う事。

では、オラクル細胞の中にあるコアはどうなるのか？

オラクル細胞と共に引っ張られると言う事である。

その後、1分にも満たない時間でコアはドリルによって粉々になった。

そして、残ったのは一枚のセルメダルだった。

「ティラノ……か、納得だ。」

紫のコアメダルは絶対零度の氷を作り出せるからな。

くくアナグラくく

「って、言う事があったのさ。」

俺は全員（アリサ以外の第1部隊、ドクター）にどんな事があったのか説明した。

「まあ、信じられるな……信じたくないけど。」

「俺達はもう伊達さんになれちゃったからね。」



「まあ、こうして無事に帰ってこれて何よりだ。」

因みに、その後外に居た新種のヴァジユラはブレストキャノンで2体ほど消し飛ばすと逃げていった。

すると、榊博士が口を開いた。

「まあ、伊達君の規格外な武勇伝は置いといて、その新種のヴァジユラのコアとメダルはどうしたんだい？」

「ああ、これね。」

俺はコアとテイラノ・セルを渡した。

「ふむ。ありがとう。ああとそうだった。あのメダルについてなんだけど興味深い事が分かったんだ。なんと、そのメダルを神機の捕食させると、不味くて吐いちゃうんだけど実験体になったタツミ君の証言だと視力が異常に良くなったそうだ。神機を持ったおかげでね。しかも、その効果は今も続いているそうだ。」

「あのメダルはタカ・・・つまり、目の良い鳥のメダルだ。それを捕食したからそうなったんじゃないかねえか？」

「うん。僕もそう思うよ。」

「つまり神機的能力が追加できるって事か。」

「ああ、特にこの能力は銃撃者には重要な能力だ。」

「でも、旧型の神機で捕食できるっけ？」

「そこは、安心したまえ。タツミ君の神機のオラクル細胞を注入させればいいさ。それじゃあ、今から神機の整備、新たなメダルの検証、いろいろやる事があるんからこれで失礼するよ。」

ドクターが部屋から出ると、ツバキさんがやってきた。

「無事帰還してきたようで何よりだ。こんなイレギュラーは、この支部では初めてだからな。」

「そついや、気になってたけど伊達さん。あんた、何でアリサが悲鳴を上げたら俺を投げた？まるで、天井が崩れるのを知ってたみたいじゃないか。」

「まあ、知ってたっていうか、予想してたな。俺は医者だしアリサの精神が不安定だった事も知ってるしな。それに、あの天井は今にも崩れそうだったしな。」

「まあいいか。結果的には無事だったしな。」

その後、俺は部屋に行っておでんジュースを飲んで寝た。

**番外編 荒神視点（前書き）**

本編に書く事がまとまらないので番外編です。

## 番外編 荒神視点

### 1 話目

#### ボルグ・カムランSIDE

私はボルグ・カムラン…人々は私の事を荒神と言う。

何でそんな事が分かるかだつて？

荒神は喰った物や生き物の知識を得る事ができる。

さらに、荒神はコアを摘出せずに放つて置くと細胞は拡散、その後は空気中のオラクル細胞を使って再生する。

再生した荒神の中には、元より強くなっていたり、弱くなっていたり、そのままの者まで居る。

因みに、私は193回目の拡散をして、オウガテイル コクーンメ  
イデン ヴァジュラ…etc

そして、現在はボルグ・カムランと呼ばれる固体となった。

そんな私の前には1人の人間が立っていた。

その人間は、銀色のオーロラから出てきた。

人間自身も状況を理解していないようだ。

とりあえず、こっちに気づかせないといけないな。

「キィシヤアアア!!」

すると人間はこちらに気づいたようだ。

その後、人間は血迷ったのか私に突っ込んできた。

しかし、人間は私を潜り抜けて私の後ろにあったケースを開いた。

……とりあえず、あの紙を呼んでいるようだし待つてあげよう。

すると今度は、ケースから何か長い物を取り出して腰につけた。

すると人間は何かを叫び、荒神には良く分からない動作をして鎧を纏った。

そして、神機か？を構えて私に撃つて来た。

何時も道理攻撃して捕食しようとしたが、何十発もの弾は、1つ1つの威力が馬鹿みたいに高い。

ああ、だめだ。もう死ぬ。

そして私は爆発した。

## 5話目

## コンゴウSIDE

ワシは人間が建てた寺に居た。

なんだか今日は騒がしい。人間共か？

致し方ない。仲間が帰ってくる前に片付けよう。

その後、人間が小石を転がしたのが聞こえた。

ゴッドイーターみたいだ。

人間が上に何かを打ち上げた。

その後、人間が更に2人増えた。

その後、1人の人間は何かを構えたまま動かない。

その人間が何かを叫ぶと、ワシは畏にかかった。

その後、ワシが見たものは赤い何かだった。

## 6話目

### グボロ・グボロSIDE

ああ、今日もこのタングスタンは最高だ。

うん、もっと食べよう。

ギュン、ギュン、ギュン！

ん、何の音「ファイヤー！！」

「ギヤアアア！！」

こうして僕は死んだ。

## 6 話目

### CONGO W SIDE

サイゴートが殺された。

それも、謎の武器を使う男に。

その男は凄い気迫でこちらに走ってくる。

ドリルを俺に突いて来た。

そのまま、刺される。

俺は抵抗するもこの男はそのままオラクルを吸ってくる。

他の人間の攻撃も痛いがこの男の攻撃は異常だ。

やばい、もう戦うだけの力がない。

活性化をしようにもオラクルが足りない……

もう……だm『セルバースト!』

ああ、人間の言葉でこの男を鬼畜っと言っのдарう。

バーン!!!!!!!!!!

### 伊達SIDE

「以上で、報告終了!」

「「「いやいやいや、問題ありすぎだ!……!」」

「えー」



番外編 荒神視点（後書き）

思いつきで書いてみた。  
後悔はしていない。

## 狙いとクアドリガと罖

伊達SIDE

最近はいろいろとおかしくなってきた。

大型荒神の依頼が増えた。しかも、今まで極東支部はあまり見なかつた種類が増えて来た。

中型2体や大型と中型等の同時討伐等などの依頼もたんまり来てる。

俺の今日の依頼はアランちゃんとクアドリガ討伐だ。

出発前にリンドウちゃんが来た。

「伊達さん。今日の依頼、気をつけてください。」

そっぴや、俺もこの前の依頼で狙われてたけ。

「大丈夫だよ！安心しろリンドウちゃん！」

「……ちゃん付けはやめてください。」

「じゃあ、第1荒神討伐部隊隊長雨宮リンドウ少尉？」

「……ちゃん付けでいいです。」

おっし！行くか！！

（～嘆きの平原～）

「伊達さん、今回はクアドリガ1体の討伐ですが、オウガテイル墮天種が居ます。」

「そうか。じゃあ、アランちゃんが氷トカゲちゃんを捕食してバレットを集めてる内に俺がクアドリガちゃんを足止め。OK？」

「はい。分かりました。」

「そんじゃあ、行くか！」

アランちゃんは、ユーバーセンスのお陰で荒神が居る所が分かる。

俺はセルメダルので遠くが見える。

おっし！発見！

俺は早速クアドリガちゃんを発見して、メダルを入れる。

『カッターウイング！』

「くられ！」

ヒウ！ズパ！

「グアアア！？」

クアドリガちゃんのミサイルポットを切り裂いた。でも、まだ使えるみたいだな。

「顔面装甲にはこれだ！」

『シヨベルアーム！』

シヨベルアームの横を使って、顔面装甲を叩く！

だが、クアドリガちゃんは一歩下がってミサイルを下に向けて撃つて来た！

「まず！！」

素早く装甲を展開。

ミサイルと爆風を何とか受け切った。

「とにかく、どうしようかねえ〜。」

近づくにも、警戒されてるみたいだしな。

「ん？」

俺はクアドリガちゃんの後ろに注目した。

なるほど、これならいけるー！！

『カッターウイング！』

毎回、これを使つては投げてるが本当の使い方はこうだよ!!

「飛べ!!」

カッターウイングのブースターが火を噴いて空へ飛ぶ。

「これぐらいでいいだろ!!」

約十メートル程上昇してから、止まる。

「伊達さん!!」

クアドリガから隠れてたアランちゃんが俺にリンクバーストする。

この俺の神機は銃身がないが、大砲ならある!

空中で装甲を展開する。

『ブレストキャノン!!』

装甲にくっつく感じでブレストキャノンが装備される。

さらに、2枚メダルを入れる。

『セルバースト!!』

「充填完了!ファイヤー!!」

そのまま、クアドリガを飲み込む。

そして、何時ものようにコアだけ残して消える。

「やりましたね伊達さん。でも、遅れてすみません。」

「いっていいって、そんな事よりも……」

ザ…ザ…ザ…ザ…

「お客様方だ。」

「『グオオオオオオ!!!』」「『』」

やれやれ、今回はヴァジユラ4体かよ…

疲れそうだ。

狙いとクアドリガと罫（後書き）

伊達さんの運命はいかに!?

## 伊達とリンドウと囷

伊達SIDE

「くそ！ 囲まれた！」

これで3回目だぞ！

先からヴァジユラちゃん4体を振り切って、囲まれるの繰り返し。

「やっぱり、戦った方がいいのか!？」

「でも、伊達さん！ これじゃやられちゃいますよ!！」

この猛撃じゃ、変身する事もできないしこいつ等は……

『カッターウイング!』

「おら!！」

「グオオオ!！」

強い固体だし……

「くそ！ カッターウイングじゃあ、足止めにすらならねえか!！」

飛行して逃げてもいいが、二人じゃ時速50Kmくらいが限界だし



……

「グオオオ！」

「あぶな！」

遠距離の大雷球があるから的になっちまう！

（こうなったら、一か八か至近距離で最大出力しかないか？）

「アランちゃん！グレネード！」

「分かりました！」

バン！

グレネードの音と光で怯む。

「今しかねえ！」

『セルバースト！』

「出力全開！！フルパワーだ！！」

ぶっ太いメダルの様な弾が出る。

バン！！！！

ヴァジュラちゃん1体をコアも残さず殺した。

これに、スタン状態が解けた他のヴァジュラちゃん達が恐れて逃げ出した。

「ふう…何とかになりましたね。伊達さん。」

「ああ。」

その後、無事アナグラに帰還した。

## リンドウSIDE

「だめよ……、リンドウ……！」

俺とサクヤとソーマは大型2体の討伐をやっていた。

しかし、クアドリガとボルグカムランを倒したかと思ったら、ウロヴォロスがいきなり現れた。

俺は1人でウロヴォロスをひきつけていた。

サクヤは重症で気絶しそうな状態だ。

「ソーマ！お前はサクヤを連れてとつとつ、アナグラに戻れ！！」

「…っち！自分が出した命令……アンタも守るんだな！」

「おう！配給ビール…取っといってくれよ？」

そう言って、ソーマはサクヤを連れて行った。

「じゃあ、行くか!!」

その後、俺はアナグラに戻って来れなかった。

くくアナグラくく

伊達SIDE

ここに来て、いい事と悪い事が続いた。

アリスの前線復帰の可能性とリンドウちゃんの行方不明だ

なんでも、ウロヴォロスの襲撃にあったそうだ。

俺もイレギュラーな襲撃があったため、アナグラは異常な空気にな  
ってる。

「このままじゃ、不味いかな…」

何とかしないとな!

「そうと決まったら!」

ピィピィ、ピィピィ

「会長か。」

俺は自分の部屋に行った。

〜伊達の部屋〜

『伊達君！君にいいお知らせがある！君の神機のパワーアップだ！』

「へえ、どんな？」

『まずは、君にプレゼントだ！』

すると、俺の机の上に急にプレゼントが出てきた。

『カンドロイドだよ！タカ、タコ、ゴリラ、ウナギ、トリケラの5種類だ！』

「おお！これは使えるな！」

『ウロヴオロスの攻撃を50回受けても壊れないぞ！』

「どんだけだよ！？」

『それで、神機なんだが—————という事だ。』

「OK！そんな凄いなら試してみたいなあ！んじゃあ、会長！行ってくるわー！」

「ああ、がんばりたまえ！！」

こうして、俺は新たな力をゲットした。

さて、張り切っていきますか！

伊達とリンドウと囀（後書き）

あらたな、神機  
の能力とは！？  
お楽しみに！

## 新神機とアリサと復活戦

伊達SIDE

俺が新たな神機の力を試そうとエントランスに来てたら、アランちやんとアリサが何か話していた。

「あ、伊達さん、丁度良かった！今から、ボルグ・カムランの討伐に行くんですが良かったら、一緒に行きませんか？アリサの復活戦を兼ねて！」

「ああ、いいぜ！よろしく頼むわ！」

「あの…この前は…すみませんでした！」

「別に問題ないよ。俺は大丈夫だ！だから、顔を上げる。」

「はい…」

「じゃあ、行きましようか！」

～～愚者の空母～～

「作戦は？」

「各自遊撃しつつ、時にはお互いをフォローして戦う。で、いいで

すか？」

「了解です！」

「OK！問題ないよ！」

「それじゃあ、行きましようか！」

3人は駆け出しって行った。

ボルグ・カムランはこちらに気づいたようだ。

「キシヤアアアー！」

「撃ちます！」

「俺もだ！」

「任せます！」

俺とアリサは素早く、神機を銃形態に変えた。

そう、これが俺の神機の新たな力。新型と同じ可変式だ！

「！？それは！？」

「企業秘密って事で！」

ダン！バシユ！ダン！バシユ！



俺とアリサは、雷属性のバレットを撃ちまくった。

「おっし！んじゃあ行くか！アランちゃん！交代！」

「はい！」

俺とアリサが前に出てアランちゃんが下がる。

「俺は前！アリサは隙があったら捕食しろ！」

「はい！」

「オラ！」

俺は神機でボルグ・カムランちゅんを殴りつけた。

「キシヤアアア！！」

そして、ボルグ・カムランは針で攻撃してくるけど。

「もっと、よく狙え！」

全て避ける！

「ハア！」

アリサは捕食して、

「んじゃあ、使つか！新しい力！」

俺はカンドロイド（タカ）を取り出して、メダルを入れる。

『カッターウイング!』

さらに、神機の穴にカンドロイドを挿す。

『タカ!カッターバーニング!』

神機の先端についてたカッターウイングがタカのような形になる。

「んじゃあ、喰らいな!」

俺は神機を突きつけて。

ダン!!

カッターバーニングを放つ。

「キシヤアア!?!」

「終わりだぜ?」

「アランさん!リンクバーストです!」

「ありがとう!」

「こっちも行くか!」

カンドロイド（タカ）をはずして、もう一個のカンドロイド（トリケラ）を出す。

『ドリルアーム!』

『トリケラ! ツインドリル!』

ドリルが割れて二つのドリルが先端に着く。

「終わりだ!」

俺はツインドリルを飛ばし、アランちゃんは「V3ピーシングニードルを発射し

「キシヤアアアア!」

ボルグ・カムランを貫通して、そのまま倒れる。

「やりました!」

「おう!」

「ミッション完了! お疲れ様です!」

こうして、アリサは無事元の感覚を取り戻していった。

新神機とアリサと復活戦（後書き）

さて、そろそろタグにチートを入れないとな。  
カンドロイドの力……強いですね。（苦笑）

## 特務とウロヴォロスと俺別行動!?

伊達SIDE

エントランスでツバキさんから依頼の内容を聞いた。

「今回の依頼はヴァジュラ1体の討伐だ。メンバーは、アラン、コウタ、サクヤ、アリサ。」

ソーマは、支部長から特務が回っている。」

「で、俺は?」

「伊達は嘆きの平原に居る荒神の討伐だ。詳細は支部長が教えるらしいので、支部長室に行くように。」

「分かりました。」

嘆きの平原……?何か居たっけ?雑魚?コンゴウ?ヴァジュラ?……ウロヴォロス?

「ナイナイ。そんなわけないだろ。いくら俺がチート臭くても……orz」

「じゃあ、各自任務に当たれ!」

「……………はい!」「……………」

〜エレベーター〜

「…おい。」

「ん？何、ソーマちゃん？」

「今回の任務…気をつけるよ。」

うあ、一気にウロヴォロスフラグが…

〜支部長室〜

「今回の任務は嘆きの平原のウロヴォロス1体の討伐だ。君の活躍に十分期待しているよ。」

「何で俺に？」

「リンドウ君に頼んでいたのだが、彼が失踪してしまったからね。今回の任務の結果でアラン君をリーダーにしようと思っっているんだ。でも、君には禁忌種討伐部隊として働いてもらいたい。」

この部隊は、禁忌種やウロヴォロスなどの危険荒神を討伐する部隊だ。

今は他のメンバーが長期滞在任務を行っているので、帰ってきてから紹介しよう。」

「はあ、わかりました。」

「では、よろしく頼むよ。」

なんか、オリジナルキャラ登場か。

アンケートの結果は此処に使うのか？（メタ発言はやめてください。  
伊達さん by 作者）

とりあえず、死なない為にがんばりますか！

～～嘆きの平原～～

俺が、嘆きたい…

「でかいだろこれは。」

ウロヴオロスの大きさは俺の何十倍だ。

でかくないわけがない。

でも、間近で見るとやっぱり驚く。

さって、どうするか……

「とりあえず、撃ちますか！」

『シヨベルアーム』

『ゴリラ！バーンロケット！』

シヨベルアームは閉じた形になりそのまま相手に発射される。

「いけ！」

「グオオ！？」

ウロヴオロスが気づいたようだ。

『ドリルアーム！』

俺は一気に近づいて足にドリルを刺す！

そのまま、オラクルを吸収。

しかし、超大型のウロヴオロスには其処まで効果がない。

足を動かして振り払われた。

「っち！ここまで、でかいとやりづらいな…！」

「グオオ…！」

触手が光る。

「っち！距離をとるか！」

俺はすぐさま離れる。

「でも、どつすりゃあいんだ！？飛び道具は限りがあるからな…！」

それぞれのCLAWSは1回の任務に3回まで使える。



ドリルアームとシヨベルアームは残り2回。

他はまだ使える。

「とりあえず、銃型体で撃ちますか！」

神属性のバレットを撃つ。とにかく撃つ。

「って、弾切れか。」

どうするか？

「やっぱり、ゼロ距離射撃しかないんじゃないかね？」

俺は神機を背中に刺して（モンハンの大剣みたいに）、バースバスターを構える。

そして、充填開始！

「うおおおおお！！！！」

突っ込む！！

触手を避け、ビームを避けてひたすら走る！

「コイツで終わりだ！！」

スタングレネードの効果で怯える、ウロヴオロスの顔面に銃を突きつけて

「充填最大値！フルファイアー！！！！」

バァーーン！！！！！！！！！！

反動で吹っ飛びながらも受身をする。

「や、ったか？」

煙が晴れると、大穴空けたウロヴオロスが居た。

「グ、オ、オオオ………」

そのままばたつと、倒れる。

「よ、よしゃあああああ！！！！」

こうして今日も無事に帰路に着けた。

## 防衛と禁忌種と激戦（前書き）

アンケートの結果は、火野映司に決定しました。  
でも、やっぱり読んでる人少ないんだねOrz  
アンケート合計数が3……アンケートなのか？

## 防衛と禁忌種と激戦

伊達SIDE

ウロヴオロスを倒してから、数日後。

アリサは元気を取り戻し、サクヤちゃんも笑顔が出てきた。

アランちゃんは第1部隊のリーダーとなった。

俺も禁忌種討伐部隊に入ったから少尉まで階級が上がった。

まあ、俺は階級とか気にしないけどね。

今日は防衛部隊の手伝いをする事になった。

まあ、昨日の夜にブレンちゃん（ブレンダン）が病室に運ばれた時に、カノンちゃんがずっと、

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……」

で、ずっと誤ってたから誤射でもしたんだろ。

〜〜イントランス〜〜

「カノン、その気を落とすな。ブレندانは直ぐ良くなるから。」

「でも……」

「あ、伊達さん来たみたいだし、挨拶しないとな。」

「はい……」

なんだ、いきなり暗いじゃん。

「おつす！初めて防衛に回るけどよろしくな！」

「はい。おねがいます！」

「おねがいます。」

やっぱり、暗いねえ。

「じゃあタツミちゃん防衛の仕事について説明してくれない？」

「ちゃんって……まあ、いいですけど。今の所まだ要請されてないのでパトロールですね。」

「OK！じゃあ、行こうか！」

「分かりました。」

〳〳外周居住区〳〳

「ここか…」

今思ったけど、俺ってこの世界の町にきたこと無いじゃん。

って言っても、ほとんど廃墟だけだな。

「外壁はどこなんだ？」

「あれですよ。」

タツミが指差した方向を見ると黒い壁のようなものがあった。

「でかいな…」

「あれ？伊達さんは見た事有りませんでしたっけ？」

やべえ、異世界の事は話さない方がよさそうだな。

「俺は、殆どアナグラに居たしな。それに、外壁の外で暮らしてたしな。」

「よ、よく生きて来れましたね。ここは、激戦区ですのに。」

「まあ、元々運はいいほうだからね。」

さてと、ごまかした所でカノンちゃんとも話すか。

「でき、カノンちゃんは どうして元気ないの？」

「い、いえそんな事はありませんよ!？」

動揺しすぎだ。

「まあ、気張り過ぎないで、リラックスして。いざという時に動けなくなるぞ。」

「なんか、上官みたいですね。」

「上官だし。」

カノンちゃんほどの階級が知らないけどたぶん俺より下だろう。

「そうなんですか？」

「ああ、昨日から少尉になったな。」

「そうなんですか！おめでとーございますー！」

「ああ、サンキュー！って、誤魔化されないからな。元気がないなら休んでいいんだぞ。」

「い、いえ、大丈夫です！」

「じゃあ、休め！これは上官命令だ！」

「ええ、それは職権乱用じゃないですか！」

「ははは、冗談だ。まあ、元気になって何よりだ。」

そんな会話をしていると、タツミちゃんから連絡が来た。

『エリア・D12にスサノオ出現！伊達さん！カノン！至急こちらに！』

「OK！つて、大丈夫なの！？」

『何とか持ち堪えてる！』

「わかった！直ぐ行く！」

そして、俺達は走り出した。

くくエリア・D12くく

「大丈夫か！？タツミちゃん！？」

「ああ、でもコイツは強いぞ！カノンは一般市民の保護！伊達さんは俺と一緒に足止めだ！」

「了解！」

こうして、俺たちの激戦が始まった。



## 防衛と禁忌種と激戦（後書き）

ああ、もう仮面ライダーオーズ終わったのか。

速かったな〜一年。

最初はダサイと思ったタトバソングも今ではかっこよく聞こえてくる。

ライダーってみんなそうだよな。

Wの時も最初はダサイと思ったし、アクセルもだった。

でも、いつの間にかかっこよくなって、最後は感動を残すんだ。

さて、仮面ライダーフォーゼはどうなるのかな？

オーズが終わっても、この小説は続けていくのでこれからも見ていってください。

## 盾とフルバースとコンボ荒神（前書き）

キーワード：GOD EATER 週間ユニークアクセスが多い順

で調べたら……

一番最初に見つけた。

ありがとうございます！これも、皆様方の応援のお陰です。

## 盾とフルバースとコンボ荒神

伊達SIDE

俺達は、スサノオと向き合っていた。

『ウホ、ウホ、ウホ！』

「キシヤアアアア！！」

「何だ！？あのスサノオは！？」

「俺が知りたいよ！」

何で、驚いてるかって？

そりゃあ驚くだろ。

目の前にはスサノオの紫の部分をオレンジ色にしたような荒神が居るんだぜ？

これも、セルメダルの影響か！？

「とりあえず、倒すぞ！」

「了解！」

「カノン！もう非難は終わったか！？」

「はい！」

「じゃあ、行くぞ！」

俺達は同時に駆け出した。

「でりゃ！」

ズグシヤ！

タツミちゃんが足を切りつける。

「喰らえ！」

バーン！

カノンちゃんが放射バレットを撃つ。

「喰らいな！」

ツツツツツツ！

俺はドリルで刺す。

しかし、そんな物は意味がないのかスサノオは尻尾を横払いする。

俺達は、装甲を展開して、カノンは避ける。

「何か、別段変わらないな。」

「！？タツミちゃん！危ねえ！」

スサノオが捕食の体勢になった瞬間、俺は何かを感じた。

タツミちゃんは避けたが、その後は驚いた。

「な、何打あの攻撃は！？」

スサノオは腕に神機の捕食時の口が着いている。

そして、それを少しの間溜めて放つ事で、強力な捕食を行える。

しかし、今回のスサノオは捕食時に2m離れた所にワニの様な口が出てきた。

「これがワニの力か！」

スサノオは両腕で顔を覆って防御した。

「足を狙えば良いだけだ！」

そういつて、ドリルを突き刺した。

カン！

しかし、それは弾かれた。

「どうなってんだ！？」

どうやらタツミちゃんも同じらしい。

カメの力まであるのか！

「こっとなつたら…！」

なんじゃありゃ！

「おい！2人とも！あいつの尻尾の先！」

「「え！？」」

尻尾の先は蛇になっていた。

「キシヤアアアアア！！！」

尻尾を地面にとにかく突き刺してきやがった！

しかも、先つぽから毒が飛んでやがる！

「くそ！タツミちゃん、カノンちゃん！増援を呼べ！俺はしばらく足止めする！」

「分かりました！直ぐ戻ってきます！」

2人は街の方へと走る。

「さてと、お仕事開始だ！」

カポーン！

「今回は、急いでるんでね！」

俺は切り札を切った。

『クレーンアーム！』

『ドリルアーム！』

『シヨベルアーム！』

『キヤタピラレグ！』

『カッターウイング！』

『ブレストキャノン！』

「うしやあ！全部乗せだ！！！」

俺はスサノオにカッターウイングを使って、突撃した。

もちろんスサノオは防御体勢に入るが、

「邪魔だああ！！！」

俺はバリアごとスサノオを貫いた。

「まだまだ！！！」

俺は上昇して、上からクレーンアームの着いたドリルを飛ばして攻

撃する。

「おっし！こんだけオラクルがあれば十分だ！」

俺はメダルを作り出した。

『セルバースト！』

『セルバースト！』

『セルバースト！』

「最大出力！だあああああ！！！」

そのまま、ビームはスサノオに当たるがスサノオもまたバリアを展開。

煙がやんだときには、スサノオは障壁から外に逃げ出していた。

「やれやれ、まだあんなのと戦うのかよ……」

その後、アナグラに戻ってすぐに対荒神装甲壁強化の為のミッションに出かけて行った。

寝る頃にはすっかり疲れていた。



## 盾とフルバースとコンボ荒神（後書き）

コンボ荒神は強いですよ。

バースも本気出さないと倒せないんだよね。

オーズ終わりましたね。

仮面ライダーが終わると何かを失った感じになりますね。

新しい仮面ライダーが始まり、そして虚しさを感じ、また仮面ライダーは続いていく。

これが、愛され続けているライダーの秘密なのかもしれませんね。

## 映司とオースとタジャドルヘラ

伊達SIDE

今日は朝早くに支部長に呼び出された。

理由は顔合わせだそうだ。

さて、どんな奴かな？

「では、伊達君。彼が禁忌種討伐部隊の一人、火野映司君だ。」

おいおい、まったく顔が一緒だぞ。

「はい！本日、極南支部から帰還して来ました、火野映司です！よろしく願います！」

「わかった。火野ちゃんこれからよろしく！」

「では、この後ペイラーからの依頼がある。なお、この依頼はもちろん禁忌種なので一般ゴッドイーターの同行は禁止する。以上だ。これからもよろしく頼む。」

「「はい！」」

〳〳火野の部屋〳〳

俺達は火野の部屋で話し始めた。

「いや、火野ちゃんが俺の手伝い役か。因みにどんな平行世界から来たの？」

「『伊達さんと後藤さんにゴッドイーターを進められてプレイした世界』の火野映司です。」

「あれ？そんな世界があるのか。てか、この部屋で乾かされてんの全部パンツじゃん！」

「はい！ちよつとのお金とPSPと明日のパンツさえあれば何処にでも行けますから！」

「ははは、どっち行っても火野ちゃんは火野ちゃんなのね。」

「はい！でも、気を付けてください。今回のへらはセルメダルで強化されていますから。」

「おう！んじゃあ、行くか！！」

「はい！」

（～煉獄の地下街～）

「伊達さん、へらの煉獄の地下街のミッションて有りましたっけ？」

「さあ？無かつたらそれはきっと作者の仕業だろ。」

(だから、メタ発言はやめて下さい。)

俺達は、メダルとベルトをつける。

「とりあえず…変身!」

「変身!」

『シャチ・ウナギ・バッタ!』

『キツキ、カポーン!』

「おっし!じゃあ、まずは探さないとな。」

「いえ、もう見つかったみたいですよ。」

火野が指差す方を見るとゲームでは白っぽい紫が発光して居る部分が真っ赤になったヘラが居た。

「キシヤア!」

「あらあ…じゃあ始めるか!」

俺はバースバスターを構え、オーズは何時もの構えは取って戦闘に備える。

「キシヤアアア!」

ヘラは急に翼を翼を広げると、翼から火の玉がいきなり飛んできた。

「あぶな!」「は!」

俺は避けて、オーズは水を操って防ぐ。

「伊達さん!このヘラは強いですよ!」

「ああ、とりあえず攻撃だ!」

俺はバースバスターを撃って、ヘラの攻撃をやめさせる。

「たああ!」

更に、火野が水流を起こしてヘラに当てる。

「今です!」

「おう!」

『ドリルアーム!』

「喰らえ!」

ジジジジジジ!

ドリルが刺さり、オラクルを吸収する。

しかし、ヘラはそんな事ではやられず両手で俺を攻撃してくる。

「くそ!」

「伊達さん！」

それをモロに喰らう。

「俺は気にすんな！集中しろ！」

スタンにはならない物の威力が強すぎる。

「伊達さんのケガ、時間かけると不味い。なら！」

オーズはベルトをスキャンする。

『スキヤニングチャージ！』

「はあああああ！……！」

ウナギのムチでヘラを捕まえて、そのままバツタの力でジャンプ、水流を上から流しながら下にヘラを叩きつける。

「セイヤー……！！！」

下に落下したヘラは何とか耐えたが、

「じゃあね、にわとりちゃん……！」

俺が銃口を向けて待っていた。

『セルバースト！』

「ファイヤー！！！！」

「ギ、キ、シャアアア・・・」

「バーーン！！！！」

爆発を起こして消えた。

「やりましたね！伊達さん！」

「おう！」

俺達はコアとタカ、クジャク、コンドルのセルメダルを持ってアナグラに帰っていった。

**日常と休息と新たな決意（前書き）**

HDとモニターの接続が悪い。  
もう、このモニターも歳かな…



## 日常と休息と新たな決意

### 伊達 SIDE

俺はこの前のヘラから取れたメダルについて気になることがあった。

「ドクター、この間タカのメダルは何処に？」

「ああ、実はなくしてたんだ。」

「はあ！？なくしちゃ不味いでしょ！？何やってんの！？」

「本当にすまないね。もしかしたら、このメダルは一定期間で何処かに移動するかもしれないね。」

「じゃあ、俺が使って使ったがいんじゃない？」

「ああ、そうしてくれると嬉しいね。じゃあ、このメダルの処理は伊達君に頼むよ。」

「ああ、分かった。任せろ！」

「今日は特に依頼は着てないからゆっくりしてくといよ。」

「そうさせて貰うよ。」

俺はラボラトリを後にした。

〜朝・食事時〜

「あ、ツバキさんおはようございます。」

「ああ、伊達か。おはよう。今日も早いな。」

普通、依頼が無いゴッドイーターの朝は早くても7時、遅くて9時になる。

俺の朝は何時も早い。今日は6時に起きた。

「まったく、コウタもそれ位早く起きれたら。」

因みにコウタは食堂が閉まる20分前に来る。

食堂の人たちはいい人だからそんな事は笑って許すが、ルールぐらい守れよ…

因みに、休みに起きるのが早いのはサクヤちゃん、アリサちゃん、タツミちゃん後は従業員やオペレーターのヒバリちゃんぐらいだ。

「あ、伊達さん。こんにちは。」

「あれ？アランちゃん？今日は早いな。」

「まあ、リーダーになったばかりなのでツバキさんに色々教えてもらおう事になったから。」

「ああ、そうか。じゃあ、がんばってるみたいだな。」

「はい！そういえば、今日のメニューは何ですか？」

「パンとスクランブルエッグとベーコンと飲み物はコーヒーか紅茶だ。」

「じゃあ、紅茶をもらおうかな？」

その後、少し会話してからお互いのやる事を始めた。

〳〳7時〳12時前〳〳

俺の休日は、

「する事ないし、新しいバレットでも作るのかな？」

ターミナルをいじり、

「火野ちゃん、調子はどうよ？」

火野の所に行ったり、

「オラア！ダア！ハア！」

訓練したりとなかなか忙しいぜ。

〳〳昼 食事時〳〳

「じゃんけんポン！あいこでしょ！あいこでしょ！」

昼は、好きなものを賭けてじゃんけん。

その後は、会話しながらの食事。

何時も道理だ。

ただ、この楽しい時間は苦痛の時間と比べると1年に10回以下なんだよな。

俺はこの世界のセルメダル集めたら、もう帰ることに何のかな？

こんな世界で笑いながら生きてる面白い奴らとお別れに何のかな？

まあ、別れは何時もそんな感じだろうな。

さびしく思っても、何時かは忘れる。

そして、きがついたらまた会ってる。

きつと、そんな感じなんだろう。

さてと、明日の任務がんばろうかな！

俺はその後、訓練して誰かとしゃべって、

休息を終わらせた。

次の任務、シオ捕獲任務に思いを馳せて。

## シオと捕獲と新たなストーリー

伊達SIDE

今回、俺はソーマちゃんと一緒にドクターに呼び出された。

しかも、3日前から支部長が何処かに出張して居ない。

そんな事を考えてるとソーマちゃんが口を開いた。

「おい、何故俺とこのおっさん呼びだした？」

「今から説明するから。」

すると、ドクターはモニターを出した。

「君達には私の護衛をお願いしたいんだ。」

「護衛？」

「そう。君たちにはこれから私と一緒に廃寺に行つて貰う。」

「何故、研究者のアンタがわざわざそんな所に出向く？理由を言うてもらおうか。」

「何、簡単は事だよ。其処に私の欲しい研究対象が居るからだよ。それと、君達には拒否権は無い。」

「っち、いいだろう。アンタの事は気に入らないがしょうがねえ。」

こうして、俺達はシオを捕獲する任務に行く事になった。

〳〵鎮魂の廃寺〳〵

「シヤアアア……」

俺達が到着すると、シュウの泣き声が聞こえてきた。

倒したみたいだな。

直にアランちゃん達、第1部隊を発見した。

コアを抽出しようとするど、

「ああ！それちょっと待った！」

ドクターが止める。

「伊達さん！ソーマ！それに博士まで！」

「そんな事より、その荒神は少しおいて置いてこちらに来て欲しいんだ。」

全員は不思議そうな顔しながらも、壁に隠れた。

〳〳十分後〳〳

ドクターが時計を取り出した。

「ふむ。そろそろ時間だ。」

シユウの方を見ると、一人の少女が居た。

全員で取り囲んだ。

「女の子!?!」

コウタちゃんは驚いてる。

「イタダキマス?」

「え!?!」

「えつと、イタダキ…マシタ?」

なんか、ちゃんとしゃべってないな。

その後、ドクターが研究室で説明すると言って俺達とこの少女はアナグラに向かった。

〳〳アナグラ 研究室〳〳

「〳〳〳ええええ〳〳〳!?!?!?」

「は、博士。今なんて…?」

「ふむ、何度でも言おう。これは荒神だよ。」

「うお、ちょ、あぶな!」

その後、偏食とかについて説明して危険が無い事をドクターが説明した。

「それで、この事は私と君達の秘密だ。ゴツドイーターが秘密裏に荒神をアナグラに入れたなんてばれたら大変だからね。」

うあ、この人嵌めやがった。

「ふざけるな!例え人の形をしてよう、化け物は化け物だ…」  
そう言っつて、ソーマは出て行った。

「伊達君。これから君には彼女の食事用のコアを採取する任務をもしかしたら頼むかもしれぬ。その時はよろしく頼むよ。」

「はいよ。まかせな、ドクター。」

「でも、そのドクターって何?」

「俺の世界でバースを作った真木って博士の事をドクターって呼んでたから、アンタもドクターって呼んでるんだよ。」

「まあ、僕はあまり気にしないけどね。」



くくエントランスく

「伊達さん！大変です！」

「ん、火野ちゃんどつたの？」

エントランスに着くなり、火野が慌てて来た。

「色が銀色で、動きが遅くて、非常に体が硬い荒神が発見されましたよ！」

「何！？」

「体の形状から、クアドリガの新種らしいですよ！」

「それって…！」

「たぶん、サイ、ゴリラ、ゾウのメダルを取り込んだ荒神だと思います。」

「まずいじゃねえか！」

「やべえなこりゃ！」

## シオと捕獲と新たなストーリー（後書き）

### アンケート

今回のアンケートはラトラーター、シャウタ、カタキリバのコンボ荒神についてです。

この3つのコンボを取り込む荒神を書いてください。  
お願いします。

## ミサイルとザゴソポセイドンと撤退

火野SIDE

俺達はそのザゴソコンボのポセイドンと戦う事になったが、伊達さんが遅い。

何やってるんだろ？

しばらくすると、伊達さんが来た。

しかし、他にも来ていた。

「あれ？ソーマ？」

「おう。今回の任務は俺達3人だ。」

「何で他の部隊の任務に俺が同行しなくちゃならないんだ。」

「まあ、ドクター直々の頼みなんだから。」

「頼みじゃなくて、命令だろ。」

「だったら、逆らえないだろ。」

「…っち。」

「伊達さん、良いんですか？禁忌種が相手なのに。」

「まあ、ドクターにも考えがあるんだろう。」

「大丈夫かな…？」

僅かな不安を感じながらも俺達は平原に向かった。

〳〳嘆きの平原〳〳

目的地に到着した俺達は、早速目標を発見した。

しかし、俺達は驚いた。

なぜなら、ポセイドンが歩いた所は穴凹だらけで歩くたびに重力操作が発動してサイゴートが飛べずにひれ伏してる。

ドンー！

「お、おいおい、これじゃあ近づけないぞ！」

「くそ！」

ソーマも伊達さんも参ってるみたいだね。

俺もだけど。

この状態じゃあ動けるのは俺だけか。

俺はベルトを着けて灰色のメダルを入れる。

「変身！」

『サイ・ゴリラ・ゾウ！ザゴーズ！ザゴーズ！！』

「何！？」

ソーマが驚いてるようだけど、気にせず両腕で胸を叩く！

「うおおおおお！！！」

ドンドンドンドンドンドン、ドン、ドン！

叩き終わると重力は元に戻った。

「グオオ？」

ポセイドンが此方に気づく。

「火野、ソーマ！奴はかなり硬いはずだ！ソーマは隙を突いてチャージクラッシュ！火野はコンボか力で押し切れ！俺は、銃で弱点を見極める！」

「了解！」

「了解だ。」

こうして戦闘は始まった。

俺は、コンボでは長時間の戦闘は無理なのでメダルを変える。

「ポセイドンにはこれだ！」

『シャチ・ゴリラ・チーター！』

俺は亜種フォーム、シャゴーターになった。

「食らえ！」

ゴリラでポセイドンを殴る！

「っー」

だが、硬い。

ゴリラのパンチにもビクともしない。

気がついたら、相手は飛んでいた。

チーターの足ですぐに離れた。

が、衝撃はすごかった。

ゲームの衝撃が直径5Mだとしたら、この衝撃範囲は20Mだった。

すごすぎる…！！

伊達さんは、銃で撃っているようだがまるで効いちゃいない。

ソーマは唯一変わっていないミサイルポッドにチャージクラッシュを放っているようだが、やはり効いていない。

「こうなったら！」

ドンー！

俺はゴリラアームを素早く打ち出した。

腕は相手の顔面装甲に当たるも、ダメージが現れない。

「やっぱりミサイルを打ち出させて装甲の中に直接叩き込まなきゃだめか！」

俺は叫んだ。

「伊達さん、ソーマ！ここは一旦、敵から離れてミサイルを撃たせて攻撃を叩き込もう！」

「わかった！」

「それしかないか。」

二人は相手から距離をとる。

すると相手は予想道理ミサイルを撃って来た。

狙いは伊達さんだった。

装甲を展開する伊達さん。

しかし、それがいけなかった。

装甲にぶつかつたミサイルはミサイルではなくロケットパンチのよ  
うな物だつた。

伊達さんはそのまま、吹っ飛ばされた。

「伊達さん!!」

俺は急いで伊達さんのほうに向かつた。

「伊達さん!しっかりしてください!!」

くそ!気絶してる上に骨が折れてる!!

「ソーマ!一時撤退だ!伊達さんの怪我が重症だ!!」

「つち!急ぐぞ!!」

『ライオン。トラ。チーター!ラタ、ラタ、ラトラーター!』

俺はライオンの力で光をポセイドンに浴びせる。

その間に、俺は伊達さんとソーマを抱えて走つた。

その後、アナグラについた伊達さんは一命を取り留めた。



## ミサイルとザゴソポセイドンと撤退（後書き）

実際にこんな荒神と戦ったら無理ゲーですよね（笑）。

アンケートはシャウタのコンボを使う荒神を考えてください。

他のコンボはもう決まりました。

できれば、グボロ・グボロ以外でお願いします。

## 対策とリベンジと最終兵器

### 火野SIDE

その後、伊達さんは3日で退院した。

どうやら、装甲で相手の攻撃を受け流していたようだ。

そして今、榊博士の所で作戦会議をしている。

「その荒神は異常に硬い上に重力操作、凶悪な攻撃力を持っているというわけか。」

「しかも、ミサイル着き……きつくね？」

「変身しても勝てるかは微妙ですね。」

「そういえば、ティラノのメダルがいつの間に消えちゃったんだよね。」

「ええええ！？まずいだろそれは！？」

「高のときと一緒だね。じゃあ、取れたメダルはさっさと使うのが一番だよ。」

「はあ……」

こんな事があった。

〓〓翌日 嘆きの平原〓〓

俺達は、二人だけで平原に来ていた。

「よし！じゃあ、行くか！」

「良いんですか？許可もらわなくて？」

「大丈夫！ドクターから許可はもらった。」

まったく、この人は……

それにしても、また、穴凹だらけだな。

ドス、ドス、ドス、ドス！

「火野ちゃん近いぞ！」

またしても、銀色のポセイドンが現れた。

「今度こそ勝つ！」

「変身……！」

『ライオン・ゴリラ・バッタ！』

俺はジャンプして相手に一気に近づき、ポセイドンの顔面を殴る！

少しは効いたようだ。相手の動きが止まった。

「うりゃああああ！」

バースバスターを連射する伊達さん。

しかし、あまり効いてないようだ。

「どうします伊達さん？これじゃあ、この前と変わらないですよ！」

「だったら、最終兵器を使うか！」

バースの最終兵器？まさか！

チャリン！チャリン！チャリン！チャリン！チャリン！

「これで千枚目！」

チャリン！キツキツキ！カポーン！

ハンドルを回し終わると、CLAWS・サソリが現れる。

「これならいけるぜ！うりゃー！」

伊達さんがパンチをすると、サソリはそれにシンクロして、相手を攻撃する。

「うりゃー！は！だあ！」

連続で攻撃する。

一発一発が強力な為、ひるんだポセイドンに何発も放たれる。

「火野！止めを刺せ！」

「了解です！！！」

『サイ・ゴリラ・ゾウ！ザゴーズ！ザゴーズ！！』

『スキヤニングチャージ！』

「はあああ！セイヤー！！！！！」

相手を、頭の角と巨大な腕で叩く！

そして、ポセイドンは吹っ飛ばされ、爆発した。

「はあ、やりましたね！伊達さん！！！」

「ああ！」

その後、ツバキさんにごつてり絞られた上に、伊達さんは無理をしていた為、1週間医務室だった。

## 回収とパシリと連続討伐

伊達SIDE

あの後、1週間の入院という名の謹慎をベットの上で過ごした俺は退院と同時にシオの服のために荒神の素材回収に来た。

ドクター……鬼だ……

とまあ、そんなこんなでソロでボルグガムに挑む事になちまったんだ。

まあ、

「楽勝だけどねっ！」

バースバスターを連射する！

しかし、それなりに捕食してきたようであっという間に最初のボルちゃんみたいに、簡単に怯まない！

あ、突っ込んできた！

「うおー！」

よけれずに喰らう。

「痛え〜！！」

まあ、特に怪我はないけどな！

「時間がないんだよ！！！」

まだ、大型2体が依頼が待ってるんだからよ！

『セルバースト！』

「ファイアー！！！」

ドカーン！！！！

その後、爆発させると素材回収ができないことに気づいた。

「ちくしょうおっ！！！」

八つ当たりで、2体目のボルグガムをフルボッコにした。

〜その後〜

「なんとか終わった……」

「お疲れしてるとご申し訳ないけど、今度は食料がなくなっちゃったんだ。アラン君達と一緒にとりに行ってきたね」

「ドクターの鬼イイイイ……！！！！！！！！」

〜嘆きの平原〜

「さっさと倒して帰るぞ！」

「伊達さん何かはりきってるね……」

「大方、榊のおっさんから連続ミッションにかり出されたからだろ。」

「おい！ぼさつとしてないでさっさと行くぞ！」

「はい。」

適当に歩いていると、目標のヴァジュラを見つけた。

「アランちゃん、ソーマちゃんが突っ込んで俺が射撃だ！」

「「<sup>だ</sup>了解！」」

アランちゃんが右側に走り、ソーマが左側に走った。

「は！」

「喰らえ！」

そのまま、ほぼ同時に切り込む。

「喰らいな！」

さらに、俺が銃形態で神属性をバレットを打ち込み、ヴァジュラがダウン。



三人で同時に切り込もうとしたら……………

グシャ…………

三人同時に吹っ飛ばされた。

「くそ、いったい何が!？」

ソーマちゃんが驚く。

そして、俺もアランちゃんも驚く。

なぜならそこには、嘆きの平原の中心から出てきたであろう『ウロヴオロス』が現れていたからだ。

しかも、全身が濃い紫色で奴の触手で触れているヴァジュラが、完全に凍っていたからだ。

紫のウロヴオロスの顔が僅かに動いた。

そして、

「グオオオオオオオオオオオオ!!!…………!!!」

全てが吹き飛ばされ、全てが凍った。

「て、撤退だ…………!!」

そこに、大きな音と一筋の光。

その後、俺達は沈黙と震える体で帰還した。

## 回収とパシリと連続討伐（後書き）

遅くなつてすいませんでした。

これからも、なるべく速く更新するのでどうかよろしくお願いします。

## 時間と追加兵器とコアバース

伊達SIDE

おう！読者の諸君！俺だ、俺！伊達明だ！

あその後、会議室でプトヴォロスについて話し合ったが何と、リンドウちゃんの腕輪のビーコンが検出されたらしい……って、まってええええええ！！

あんな化け物を主人公達で倒せるわけねえよ！！

無理ゲーだ、無理ゲー！

俺なんかトラウマだし…（涙）

いや、あれは卑怯だろ。唯でさえ攻撃範囲が広いのに咆哮一つで凍らせるとか、触れただけで凍るとか、威圧感だけでもう逃げたくなくなるし……

「ああ、そつだ。伊達君、君の会長が20分後に話したいって言うってたけど。」

「分かりました。じゃあ、失礼します。」

会長が俺に…？

一体何なんだ？

くく20分後くく

「伊達君。そろそろはその世界から此方に戻るときが来た！映司君達には君の力が必要だからね！」

「でも、まだセルメダルが全然揃ってないんですが。」  
すると渡ちゃんが出てきた。

「一応、此方の時間とそちらのズレを伸ばしましたが、それでもそちらの日にちで3ヶ月でしょう。」

「そんだけあれば十分だって！」

「ですが、そろそろきついんじゃないんですか？」

「っ!？」

「大丈夫です。プトヴォロスを倒すための兵器があります。」

「え、マジで!？」

「このハンドルをつけてください。」

俺の前に霧が集まり、バースのメダルを入れて回すハンドルが現れた。

しかし、色は金色ではなく虹色で。

「このハンドルをドライバーに着ければコアメダルを使用できます。もちろん、使い捨てではありません。それに、オーズと違い3枚ではなく1枚で1パーツになりますから、2枚までなら体に負担はありません。」

「わかった。」

「ですが、3枚以上は危険です。映司さんを見てきましたよね。」

「わかってるよ。大丈夫だって、3枚同時はしないから。」

「わかりました。では、がんばってください。」

「ああ、サンキュー！」

「では、コアメダルを贈ります。とりあえず、ウナギ・クジャク・ゴリラ・トラ・カマキリのコアを送ります。ですが、そのメダルはレプリカなので貴方がその世界から消えれば消滅します。」

「じゃあ、早速実験してみる。」

「健闘をお祈りします。」

俺は、自室のドアを潜り抜けた。

〜〜エントランス〜〜

さて、今回の依頼は何にしようかな？

「じゃあ、ヒバリちゃんこれで。」

俺は雪崩を選択した。

内容は中型のグボロちゃん1体とコンゴウ墮天ちゃん2体の討伐だ。

じゃあ、行きますか！

〳〵鎮魂の廃寺〳〵

「って、これは無いだろう……」

お約束の囲まれた状態だ。

「まあ、行きますか！」

俺は変身する。

「じゃあ、先ずはトラだ！」

『トライデンフアング！』

すると、俺のうで黄色くてでかい爪が3つ付いてる腕がつけられた。

まるで、仮面ライダータイガみたいだな…

「喰らいな……！」

腕を思いっきり振り回す。

さらに、そこから衝撃波が出て荒神達を深く切りつける。

「次はこいつだ！」

『エレキチェーンソー』

まて、まて、まて、まて……！！

どう考えたって、ドリルと同じくらいグロイだろ！

そして、どっかの後輩ライダーのパクリだろ！

ツ、ツ、ツ、ツ、グシャアアア！

ひどすぎるだろ……！！

グボロを切り付けてでかい切り口にオラクル細胞によく効くチェーンソーの電撃で攻撃。

電気が苦手なグボロちゃんはダウン。

俺は、チェーンソーを解除する。

「ラストだ！」

『バーストブラスト』

クジャクのメダルは大砲だった。



「終わりだ!!」

その大砲から巨大な火の玉が出てコンゴウちゃん達は避けるが、玉は停止。

破裂して中から羽根型の火球が30本出てきてコンゴウちゃんに直撃。

火が苦手なコンゴウ墮天ちゃんは2体とも消えていった。

俺から出たの一言、

「凄過ぎるだろ……………」

これなら、あのプトヴォロスも……!!

## 時間と追加兵器とコアバース（後書き）

なんか、魔改造されたバース。

これならウロヴオロスを倒せるのか？

## 氷と雷と仇討ち（前書き）

マジですいません！

最近、勉強やら試験やらで忙しくて更新できませんでした！

ブラジルの学校はもう少しで終わりです。

日本の皆さんはこれからですか？頑張ってください。

## 氷と雷と仇討ち

カウント・ザ・メダル！現在、伊達が集めたメダルは……  
タカ、クジャク、コンドル、サイ、ゴリラ、ゾウ、コブラ、カメ、  
ワニ

### 伊達 SIDE

コアバースの機能を使いこなし始めている今日この頃、俺伊達明を  
含むゴッドイーター7人が呼ばれた。

メンバーは、アリサ、ソーマちゃん、アランちゃん、サクヤちゃん、  
コータちゃん、火野、そして俺。

「今回の任務は、先日伊達、ソーマ、アランの三名が遭遇したウ  
ロヴォロスの変異種が嘆きの平原に出現した。

しかし、それと同時に30体ものヴァジュラテイルが現れた。よっ  
て、今回のみ特別に同一企画に2チームを送ることにした。

ソーマ、アラン、伊達、サクヤをウロヴォロス討伐に、残りの3人  
はヴァジュラテイルを討伐しだい、ウロヴォロス討伐隊と合流しろ。  
以上だ。質問のある奴はいるか？」

アランちゃんが聞く。

「ウロヴォロスについて弱点や対策は？」

「……火属性が有効だ。それと同時に、なるべく遠距離からの攻撃

し、相手の攻撃は必ず回避しろとの事だ。」

それって、対策になってんの？後、攻撃範囲が広すぎるから避けれないと思うんだけど。

「では、解散！」

〃〃嘆きの平原〃〃

「伊達さん！なるべく早く速く帰ってきますから、無茶しないでくださいー！」

「おう！お前たちもな！」

そう言って、俺達の隊と火野達は別れた。

#### 火野SIDE

伊達さんと別れた俺達の前にはたくさんのヴァジュラテイルが居た。

「皆気をつけて！恐らくこの中の1体が本体だ！それさえつぶせば他は消えるはずだ！」

「了解しました！」

「OK！」

ヴァジュラテイルが一斉に電撃を放った。

『キシヤアアアアアアア！！！』

「はあ！」 「は！」 「おっと！」

それをジャンプして避ける。

「ならこれだ！変身！！！」

『クワガタ！カマキリ！バッタ！ガクタ、ガタガタキリッバ！ガタキリバ！！』

俺はガタキリバとなって、分身を作り出した。

「は！たあ！ほ！つたあ！！！」

相手に近づいて斬り、

電撃を電撃で相殺し、

時には連携して斬った。

「コータさん！あそこを撃ってください！」

「了解！」

アリスが建物の上に居たヴァジュラテイルを発見し、それを撃つようにコータに指示する。

「っつー！」



弱点の筈の火属性の弾丸が効いてないし、ビームが当たった所の直径2m位が凍るし、

仕舞いには、俺のバーストブラストを喰らって怒り始めてるし……

「え、えい！喰らえ！」

バースバスターを連射しても効いてる気配が無いし……

つか、アランちゃんとソーマちゃんってどうやって近づいてんだ！？攻撃受けてないし……！

「頑張れば出来ますよ！？」

「経験の差だな……」

そんなに差があるの！？俺と二人！？

「頼むから、こんな怖い相手の前で会話しないで！」

すみませんサクヤちゃん。

「とにかく、他の隊が来る間だ。伊達さん！大丈夫ですか！？」火野、良いタイミング！」

「アリサは、コータやサクヤさんと一緒に遠距離からの攻撃！火野さんと伊達さんは遊撃でお願いします……！」

おお、リーダーらしくなっちゃって、おじさん感激……！



「リーダーですから！」

「そついやそうだったね!!」

「伊達さん！決めちゃいましょう！」

『タカ・クジャク・コンドル！タ〜ジャ〜ドル〜！』

そう言つて、火野はタジャドルになる。

「俺も決めますか！」

バースバスターにコアメダルを入れる。

『セルバースト・フレイム！』

『スキヤニングチャージ！』

「喰らえ！」

ソーマちゃんのチャージショットが炸裂し、

「はあ！たあ！」

アランちゃんがインパルスエッジを連射し、

「」「喰らえ（当たれ）（おりゃあああ）！……」「」

サクヤ、アリサ、コータの一斉射撃を受ける。

「充填完了！フレイムバージョン！！」

「はあああああ！！！！！！」

火野は高く跳び、俺は銃を構える。

「セイヤー！！！！！！！！」

「喰らえええええ！！！！」

二つの炎を喰らって、プトヴォロスはついに倒れた。

その炎を見ながら俺は思った。

（あれ、今の技ってフォーゼのじゃね？）

俺の心は最後まで締まらなかった。

その後、コアを摘出した後、リンドウちゃんの腕輪と神機が見つかったせいで、サクヤちゃんは泣いた。

暫くして、迎えのヘリで俺達は無事にアナグラに着いた。

## 氷と雷と仇討ち（後書き）

そろそろ、無印が終わりますね。

一旦この小説を完結させて、新しくバーストで後藤さんにチャレンジしようかな？

皆さんはどう思いますか？

ストーカーと水とボルゲガム(前書き)

久しぶりですね。

今年も頑張るんで、よろしくお願いします！

## ストーリーカーと水とボルグガム

カウント・ザ・メダル！現在、伊達が集めたメダルは…

タカ、クジャク、コンドル、クワガタ、カマキリ、バッタ、サイ、  
ゴリラ、ゾウ、

プテラ、トリケラ、ティラノ、コブラ、カメ、ワニ

おっす！プトヴォロスを倒した伊達明だ！

ここ最近、サクヤちゃんとアリサちゃんがアナグラからエイジス島  
に向ったらしい。

アランちゃん達も様子がおかしい。

恐らく、終盤近くなんだろう。

そんな事より、シオちゃんが行方不明になったらしい。

俺は支部長の命令により、未確認の荒神のコアの採取と近辺の荒神  
の討伐を命じられた。

ミッション名はデスストーリーカー…せめてスパイにしてくれ…俺は  
ロリコンじゃない。

この任務ではボルグガムの墮天種2種類が1体ずつ。

じゃあ、行くか！

くく嘆きの平原くく

「つて、やべえ！！！！」

俺は雑魚10体とコンゴウとグボロ5体ずつ、そしてボルグガム2体に囲まれていた。

「変身！！！」

直ぐに変身した。

兎に角やる事は1つ！！

『カッターウイング！』

「戦略的撤退！もとい、逃げる！！！」

これに限る！

その後、距離を取った俺は…

『ブラストキャノン！！』

殲滅開始だ！

「オラ！ファイアー！！！」

赤い光線は雑魚や中型を消し飛ばした。

しかし、ボルグガムは盾で防いでいた。

「まあいいか！似たいならまだ楽勝だ！」

と思っっていたら…

「って、ボルグガムの墮天種に青色ついていたっけ？」

現実には甘くないようだ。

くく十分後くく

「しまったあくくく！！！」

その後、素早く火炎種を倒した俺だが、青いほうのボルグガムはコンボ荒神だった。

「キシャー！！！」

「いや、マジでそれ危ないから！！！」

タコのメダルのせいで尻尾の針が8本の吸盤、それを螺旋状に合わせるとドリルになる。

そのドリルが、連続で俺の方を攻撃し、それを避けたら地面が3mは抉れていた。

さらに、元は雷電種だったために、ウナギで電気の威力がアップ、水を飛ばした上で電気を飛ばす。

かなりエグイな…（アンタもだ！）

さて、作者からのツッコミも飛んできたし、始めますか！

『ドリルアーム！』

「こっちのドリルの方が痛いんだぜ！」

俺は腕のドリルでボルグガムのドリルを弾き、そのまま相手に刺した。

が…

「ええ〜？そりゃあ無いでしょ…！」

液体化した。

「キシヤアアア…！」

シャウタってチートだったんだ…

液体化した相手は、凄い水圧の水を尻尾の部分から発射した。

「あぶな…！」

避けて後ろを見ると、建物がぶつ壊れていた。

「大砲じゃないんだから…！」



これは不味いかな……

「キシヤアアア!!!」

液体化を解除した相手がまた、攻撃してきた。

「液体は…水!!!」

なら、これしかない!」

『バーストブラスト!』

俺の体に、孔雀の羽を模した大砲が付けられる。

つて、電撃が!!!

「あぶねえ!つて!?!」

条件反射で跳んだら、俺は飛んでいた。

てか、大砲の翼がデカイ!

「これつて、飛べるのか!?!まあいいか。」

『セルバースト・フレイム!』

大砲に熱が集まる。

「つて、これつて熱過ぎるでしょ!?!」

マジで熱い!!

「喰らえ!ファイヤー!!」

その攻撃を受けたボルグガムは、メダルを残して蒸発した。

「ふうふう、これで終了っ!」

ああ、疲れたな

終盤戦…頑張るか!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7920v/>

---

ゴッドイーターバース

2012年1月10日06時54分発行